

東アジアのなかの前畑遺跡

亀田 修一

1. はじめに

筑紫野市前畑遺跡の「土塁状遺構」は、2015年に発掘調査され、その後、追加調査が行われ、確認できた長さ、構築方法、位置、そして出土土器などから古代の大宰府に関連する土塁ではないかと推測された。そして2025年3月10日に国指定史跡に指定された。

今回のトークセッションで亀田に与えられたテーマは、「東アジアのなかの前畑遺跡」で、古代大宰府の外郭線の一部をなすと推測されている前畑遺跡の土塁について東アジア、おもに朝鮮半島の例との比較・検討を行ってみたい。

なお、小稿では基本的に「大宰府羅城」ではなく、「大宰府外郭線」という用語を使用している。九州歴史資料館を中心に調査検討され、刊行された九州歴史資料館2023『大宰府外郭線Ⅰ』の成果によっている。また、大宰府の外郭線に関連する水城大堤、小水城群、大野城跡、基肄城跡、とうれぎ土塁、関屋土塁、そして前畑遺跡、阿志岐山城跡などを含めて、小稿では大宰府外郭線関連遺跡群と呼んでおく。

2. 前畑遺跡の概要（図1）（小鹿野ほか2017、筑紫野市2020・2021）

前畑遺跡は、福岡県筑紫野市大字筑紫・若江に位置する。2015年から2021年までの発掘調査によって、総延長558m以上に渡って築かれた「土塁状遺構」であること、出土遺物から7世紀中ごろから9世紀後半にかけて築造・使用された構造物であること、場所に応じた地山整形、層状積み・土塊積みなど多様な土木技術を採用していること、その技術が朝鮮半島の土塁構築技法とも共通する要素を含むことなどが明らかにされた。

そして、上記の特徴と検出されたその位置、つまり、大宰府政庁跡を挟んで北側・博多湾側の水城跡などの南側・反対側に位置することから、古代大宰府に関連して築かれた大規模土木構築物であり、大宰府を取り巻く大野城や基肄城や水城などの7世紀後半に築かれた防衛拠点と一体的に機能した大宰府の外郭線の南側の一部ではないかと考えられたのである。

3. 中国・朝鮮半島の古代の羅城・外郭線

日本列島には基本的に都市を囲む城壁、いわゆる中国の羅城に類するものは戦国時代の北条氏の小田原城、豊臣秀吉の大坂城の総構え、そして京都の御土居など僅かしか知られていない。

（1）中国（図2）

中国の羅城は、一般的に王宮が王都の北側にあり、その南側や周辺に碁盤目の道路が走り、そこに王族や貴族や一般の人々が生活し、その外側を方形に城壁が囲む姿をイメージすること



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

が多いと思われる。

このような直線による方形の城壁を持つ例は、中国の北部、黄河流域周辺地域の平地（平原）に築かれた都城、長安や洛陽の都が代表的である。直線・方形を基本とした日本列島の平城京はすでに述べられているように唐の都長安がそのモデルと考えられている。

ただ、中国の南部、長江流域地域では、筆者の不勉強にも拠るかもしれないが、黄河流域地域の直線・方形を基本とした城壁・外郭線を持つ都城は探し出せず、図 2-2 のような周辺の山などを繋いだ南朝の建康城（南京）を見ることができる。このような自然地形の山などを繋いだ外郭線の詳細についてはいまだ十分な発掘調査はなされておらず、今後の調査・検討に期待したいが、この建康城の外郭線（羅城）が、朝鮮半島の百済泗沘（扶余）羅城のルーツではないかと古くから指摘されている（秋山 1984 など）。

つまり、中国の都城の羅城・外郭線も周辺の自然地形に制約を受けながら形作られたものが多くあったと推測される。

(2) 朝鮮半島（図 2-4、図 3）

朝鮮半島の羅城については、高句麗後期平壤（長安）城（586～668 年）と百済泗沘（扶余）都城（538～660 年）が羅城・外郭線を持っている（田中 2011）。

高句麗平壤城は現在の平壤（ピョンヤン）市に位置し、『三国史記』長寿王 15 年（427）条に「都を平壤に移す」とあり、清岩里土城が王城とされている。その後、『三国史記』陽原王 8 年（552）条に「長安城を築く」、平原王 28 年（586）に「都を長安城に移す」とある。この長安城は清岩里土城のすぐ南西側の現在の平壤の中心域に位置し、東・南側に位置する大同江の流れに沿いながら、城壁を築いている。城周は約 23 km と大きく、北から北城、内城、中城、外城に区分され、内城が中枢部で、外城に方形地割が施されている。外形的には中国北方の直線・方形の都ではなく、中国南朝の自然地形に沿った南京建康城の曲線形態に近いようである。

百済泗沘（扶余）都城は、『三国史記』聖王 16 年（538）条に、「都を泗沘に移し、国を南扶余と号す」とあり、熊津（忠清南道公州市）から南約 30 km の現在の忠清南道扶余邑の地に遷都したことが記されている。都の中枢部は公州を通して南流する錦江が北東から西に、そして南東方向に大きく湾曲して流れる平野部に築かれた。北側に標高約 105m の扶蘇山に築かれた城周約 2200m の扶蘇山城があり、そこから東に小型の青山城を経て、陵山里古墳群の西の山を経て、南の山に南下する羅城が築かれている。扶蘇山城から西側に関しては、近年の調査では、羅城はなかったとの考えが有力（朴淳發 2011）であるが、全くなかったのかいまだ決定的ではない。

王宮は扶蘇山城の南の山麓部に位置し、その南側に、明確な方形区画ではないが、東西南北に通る道が確認されている。そして、その中に定林寺などの寺院が建立されている。



4. 前畑遺跡と百済の羅城・外郭線

大宰府の外郭線については、古くから百済の泗沘（扶余）羅城との関係が述べられている（鏡山 1968）。筆者も基本的には同様に考えている（亀田 2023）が、当然、細部では違いも見られる。

例えば、泗沘羅城など朝鮮半島の土塁で見ることができる「版築」については、水城大堤や大野城跡の土塁では、「いわゆるきれいな版築」を見ることができるが、前畑遺跡では部分的な層状積み土はあるが、泗沘羅城のような明確な版築土塁はない。小水城の春日市域の大土居水城跡や天神山水城跡でも部分的に層状積み土は見ることにはできるが、水城大堤に比べると厳密な意味では違いがあり、そして、前畑遺跡や大土居水城跡や天神山水城跡では土塊積み（表土ブロック）が見られる（図 1-3）。このような土塊積みは朝鮮半島の三国時代の池の堤などで見ることにはできる（大阪府立狭山池博物館 2021）が、泗沘羅城ではよくわかっていない。

また、このようないわゆる版築土塁をやや湿地状のところで積み上げる場合、泗沘羅城では「敷粗朶工法」と呼ばれる土層と土層の間に葉っぱのついた木の枝を挟んで土塁を積み上げる工法が使用されており（図 3-4）、大宰府の水城大堤でもその使用が確認され、両遺跡の関係が述べられることが多い。ただ、この工法は今述べたように湿地状のところでよく使用されており、丘陵上に土塁を築く前畑遺跡の場合は、立地が異なるためにその使用がないということもできる。

さらに、泗沘羅城では土塁の前面に裏込めを持つ石垣が確認されている（図 3-3）が、大宰府外郭線では基本的に土塁前面に裏込めをもつ石垣はないようである。前畑遺跡でも裏込めをもつ石垣は確認されていない。そして、泗沘羅城では雉城（横長型）（図 3-5）が 3 カ所確認されており、大野城跡でその可能性があるものが指摘されているが、現時点では詳細不明である。

このように大宰府外郭線と泗沘羅城には類似点と相違点があり、前畑遺跡の土塁状遺構については泗沘羅城との直接的な関わりはよくわからないが、大宰府外郭線の水城大堤、大野城跡、基肄城跡、そして小水城群とは共通点もあり、相違点もある。そして、このような大宰府外郭線関連遺跡群と前畑遺跡土塁状遺構の共通点と相違点をどのようにとらえるかが、前畑遺跡土塁状遺構の意味を考えるポイントと考えている。

現時点で、筆者は、やはり大宰府外郭線の北部に位置する水城大堤と小水城群は、博多湾からみた正面であり、『日本書紀』天智天皇 2 年（664）条の「対馬・壱岐・筑紫に防人と烽をおき、水城を築いた」という記事は、大宰府外郭線関連遺跡群の中での優先順位を示し、まず、水城を築造したものと考えている。

この水城大堤と小水城群、大野城跡・基肄城跡、そして、南側の前畑遺跡土塁状遺構、基肄城跡南東側の「とうれぎ土塁」と「関屋土塁」などの築造順序の詳細はわからないが、少なく



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

とも前畑遺跡土塁状遺構はこれらのなかで遅れて築造され始めたのではないかと考えている。

筆者は、この10年ほど前から古代山城未完成説を提示している（亀田2014）。西日本各地の古代山城、特にいわゆる神籠石（こうごいし）系山城には未完成と考えざるを得ないものが多く、実際の築城における優先順位や、現実的な費用・人員などの不足によって未完成のまま止まってしまったものがあると考えている。

大野城跡や基肄城跡などいわゆる朝鮮式山城は基本的に完成し、大野城跡では修築の痕跡も見つかっている。つまり、大宰府外郭線関連遺跡群では水城大堤、大野城跡、基肄城跡は完成し、北部の小水城群は谷部・低地部の土塁は完成しているようである。ただ、その小水城群の横の丘陵上の土塁が本当に築かれたのかは検討が必要である。少なくとも春日市天神山水城跡の西側の丘陵上には天神山古墳（1号墳：墳長35mの前方後円墳、2号墳：円墳）がそのままきれいに残っている。発掘調査はなされておらず、築造時期など詳細は不明であるが、少なくとも7世紀後半の天神山水城跡より古いことは間違いなく、これらの古墳の墳丘が多少流出しているとしても、現在そのまま確認できるということは、この古墳の場所に天神山水城跡につながる外郭線土塁が築かれていなかったことは間違いないであろう。

つまり、大宰府外郭線は少なくとも完全に連結していないことは間違いなく、古代において水城大堤を中心とした途切れ途切れの小水城群の土塁、大野城跡・基肄城跡などの山城によって関連遺跡群が構成されていたものと推測される。

そこで、前畑遺跡土塁状遺構をどのように考えるかである。

筆者は、築造時期は水城大堤など北側の防御線よりは遅れたと考えている。出土土器で細かな前後関係は確認できないが、ひとまずそのように考えている。そして前畑遺跡の土塁状遺構の積み方は、水城大堤に比べていろいろな特徴を示しており、その多様さは、百済からの亡命貴族たちの指導のもと、国家、大宰府関連の人々の力を合わせて「版築土塁」を築いた水城大堤に比べて、やはり技術的な不十分さを反映しているのではないかと推測している。また、土塁状遺構が築かれた丘陵上での位置（占地・選地）は、百済や日本列島の典型的な古代山城の場合、尾根筋よりやや外側、少し下がったところに築かれるのが基本であると考えているが、前畑遺跡ではその位置がややずれているものがある。

筆者はこのような土塁状遺構の尾根との関係や多様な土塁状遺構の積み方、やや未熟な技術の人々も含めた、やや統一性に欠ける築造技術は、水城大堤などに比べて時間的に遅れて築造されたことを示しているのではないかと考えている。あわてて築き始めたので多様な技術の人々を動員して築き、このような多様性を持つ土塁になったとも考えられるが、一方で博多湾側に水城大堤があり、やはり、水城大堤が国家やのちの大宰府の技術力や人員を集めて、まず築かれ始めたと考えたほうが素直であろうと考えている。さらに、大宰府外郭線の南側に前畑遺跡、佐賀県関屋土塁・とうれぎ土塁以外に、明確な土塁が確認できていないことは、それらが



築造後に削られてしまった可能性も当然あるのではあるが、やはり、大宰府外郭線は全周していなかった、つまり未完成であったからではないかと考えている。そのような意識で百済の泗沘羅城をみると、同じように扶蘇山城から東側でしか確認できていない。この東側に羅城が築かれたのは、東側の新羅（北の高句麗も）を強く意識していたことによるのではないかと考えている。泗沘羅城の西側の土塁は当初から作る意識がなかったのか、それとも意識はあったが、諸般の事情で未完成に終わったのか、それは分からない。

大宰府外郭線も築造に優先順位があり、前畑遺跡が位置する南側はやや遅れて築造され始めたことで、現在確認できるような状態になっているのではないかと考えている。

大宰府外郭線の南側に位置する筑紫野市阿志岐山城跡（筑紫野市 2008・2011）は、この外郭線につながるのか、独立して機能したのかはわからないが、現時点では北側約 1/3 しか列石土塁線は確認されていない。筆者は阿志岐城山跡も未完成の可能性を考えている。

前畑遺跡や阿志岐山城跡の総合的な調査を今後期待しているが、現時点では、筆者は大宰府防御体制構築の優先順位などによって、現在のような様子になっているのではないかと考えている。

5. おわりに

以上、大宰府外郭線関連遺跡群の一部をなすと考えられている前畑遺跡の土塁状遺構をおもに百済の泗沘羅城などと比較検討してきた。

両者の類似点と相違点、これは百済地域の土塁・石塁などの多様な築造技術と日本列島の土塁・石塁築造技術が、百済からの亡命貴族たちの指導が大宰府外郭線関連遺跡群の土塁などにそのまま反映されたのか、それとも日本列島にそれ以前にもたらされ、培われた土塁構築技術も含めて築造されたことでこのような形になったのか、筆者には現時点ではよくわからないが、少なくとも前畑遺跡の土塁状遺構の築造技術の多様さはまさに当時の両地域の土木技術の多様さと構築体制のあり方を教えてくれているものと考えている（亀田 2021）。

小稿をなすにあたり、小鹿野亮館長、海出淳平氏を始め、筑紫野市教育委員会のみなさん方には多くのことをご教示いただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。

〔参考文献〕（五十音順）（中国語・韓国語は日本語読みにして並べた）

相原嘉之 2004「倭京の“守り”—古代都市 飛鳥の防衛システム構想—」『明日香村文化財調査研究紀要』4、明日香村教育委員会文化財課、69-90

青木敬 2017『土木技術の古代史』歴史文化ライブラリー 453、吉川弘文館

赤司善彦 2023「(6) 東アジアの外郭線」九州歴史資料館（進村真之）編『大宰府外郭線 I』193-205

秋山日出雄 1984「南朝都城「建康」の復原序説」檀原考古学研究所編『檀原考古学研究所論集第七』吉川弘文館、7-32



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

東潮・田中俊明 1989『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社

東潮・田中俊明 1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社

大阪府立狭山池博物館（久永雅宏）編 2021『大阪府立狭山池博物館開館 20 周年記念令和 3 年度特別展 狭山池のルーツ—古代東アジアのため池と土木技術—』

小鹿野亮・海出淳平・柳智子 2017「筑紫野市前畑遺跡の土塁状遺構について」『第 9 回西海道古代官衙研究会資料集「新発見の古代の土塁を考察する」（筑紫野市前畑遺跡の検討）』古代山城研究会・西海道古代官衙研究会合同研究会、1-30

鏡山猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房

亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ—論考編 1—』熊本県教育委員会、17-40

亀田修一 2021「古代山城と地域社会—備中鬼ノ城を中心として—」熊本県教育委員会編『令和 2 年度（2020 年度）鞠智城座談会 地域社会からみた鞠智城』17-31

亀田修一 2023「(8) 大宰府外郭線土塁に関する覚書—扶余羅城との比較—」九州歴史資料館（進村真之）編『大宰府外郭線Ⅰ』223-230

九州歴史資料館（進村真之）編 2023『大宰府外郭線Ⅰ』

百済古都文化財団編 2018『扶余羅城東羅城Ⅳ—陵山里山区間 雉・城壁—』（財）百済古都文化財団発掘調査研究報告 69（韓国）

新宮学 2011「中国近世における羅城—明代南京の京城と外郭城の場合—」橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、3-22

成懸華 2022「扶余羅城の築造技法検討」『韓国城郭学会 20 年の研究成果集成』韓国城郭学会、77-103（韓国）

妹尾達彦 2011「隋唐長安城の皇室庭園」橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、269-329

妹尾達彦 2014「Ⅲ. 最新都城調査・研究成果 02 東アジアの都城と宮苑構造—7～8 世紀を中心に—」『古代東アジア都城と益山 王宮城（下）』国立扶余文化財研究所、24-69（韓国）

田中俊明 2011「古代朝鮮における羅城の成立」『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、23-41

筑紫野市教育委員会（草場啓一）編 2008『阿志岐城跡—阿志岐城跡確認調査報告書（旧称宮地岳古代山城跡）』筑紫野市文化財調査報告書 92

筑紫野市教育委員会（草場啓一）編 2011『阿志岐城跡Ⅱ—阿志岐城跡確認調査報告書総括編—』筑紫野市文化財調査報告書 104

筑紫野市教育委員会（海出淳平）編 2020『前畑遺跡第 13 次発掘調査—土塁状遺構の発掘調査—』筑紫野市文化財調査報告書 121

筑紫野市教育委員会（小鹿野亮・川口陽子）編 2021『前畑遺跡—重要遺跡確認調査—』筑紫野市文化財調査報告書 122

忠南大学校百済研究所編 2000『百済泗沘羅城Ⅱ—整備復元のための東羅城区間断面切開調査—』忠南大学校百済研究所学術研究叢書 3（韓国）

潘谷西主編 2001『中国古代建築史』4、中国建設工業出版社（中国）

朴淳發 2011「泗沘都城研究の現段階」橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、42-68

楊国慶・王志高 2008『南京城牆志』鳳凰出版社（中国）



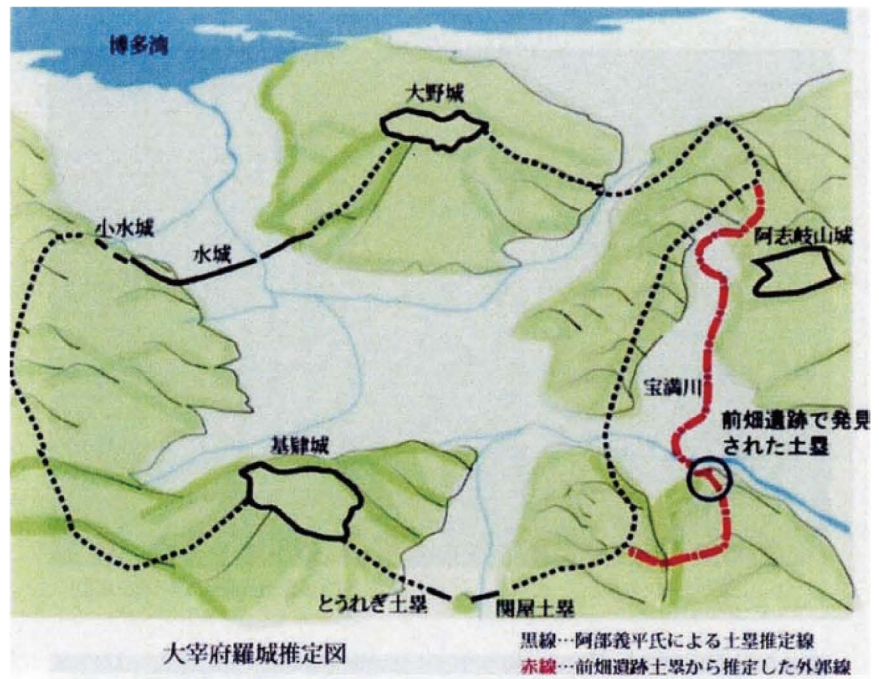


図 1-1 大宰府外郭線想定図
(小鹿野・海出・柳 2017 一部改変)



図 1-2 筑紫野市前畑遺跡第 1 トレンチ南壁土塁状遺構 (180115：亀田撮影)



図 1-3 筑紫野市前畑遺跡第 1 トレンチ
南壁土塊積み (180115：亀田撮影)



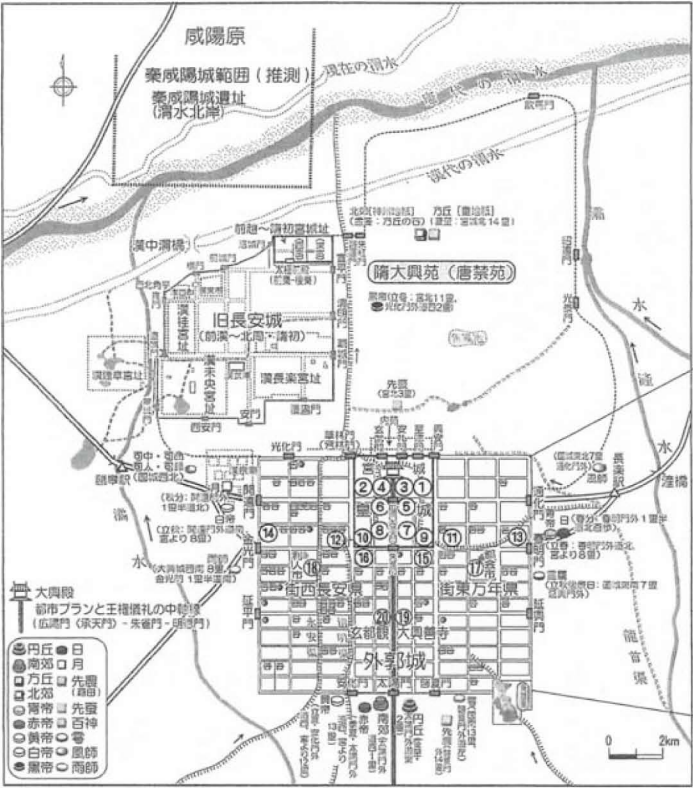


図 2-1 西安・隋大興城（583～618 年）（1/250,000）
（妹尾達彦 2011 一部改変）

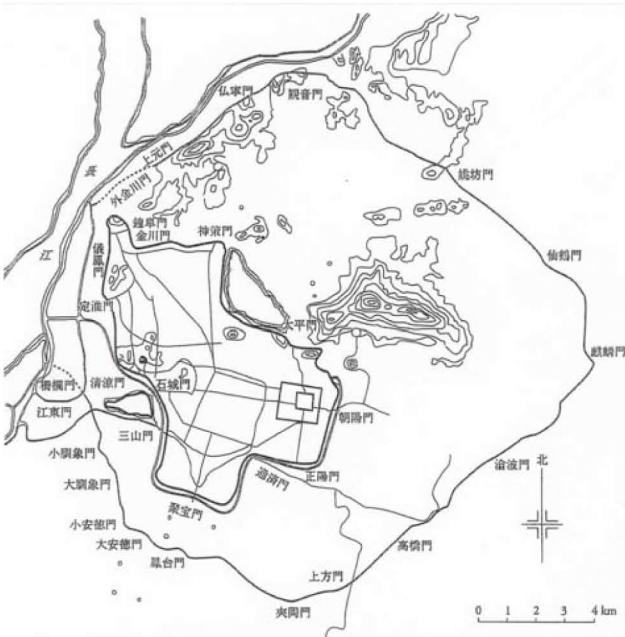


図 2-3 南京・明南京外郊図（1/250,000）
（新宮 2011 一部改変・原典潘谷西 2001）

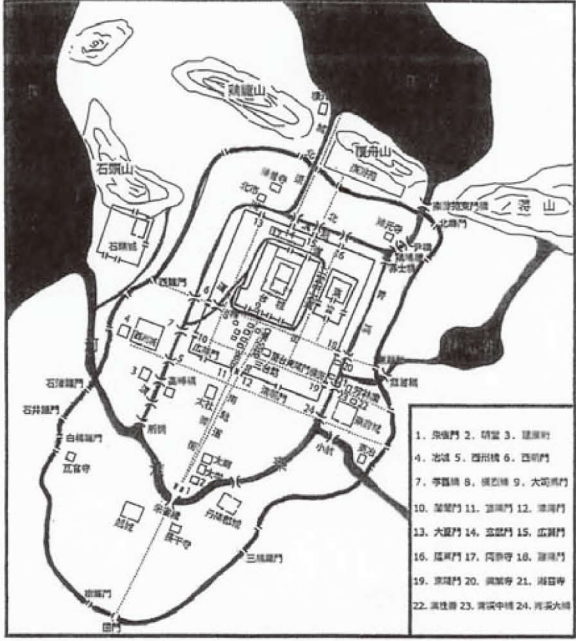


図 2-2 南京・南朝建康城（縮尺不明）
（赤司 2023 一部改変・原典楊・王 2008）



図 2-4 高句麗長安城〔平壤城〕（1/70,000）
（東・田中 1995 一部改変）



図 3-1 百済泗沘羅城城壁線 (1/75,000)
 (成懸華 2022 一部改変)

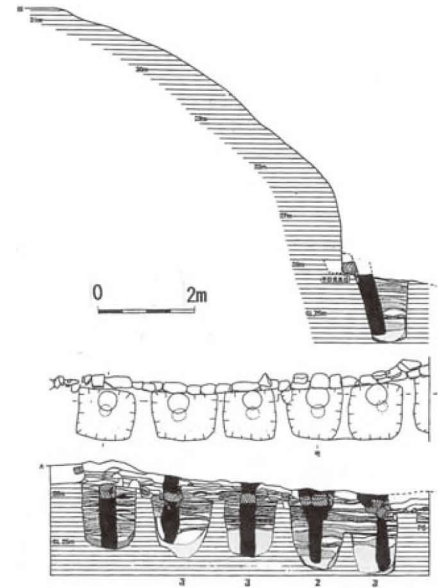


図 3-2 百済泗沘羅城東門跡土塁・石垣
 前面柱穴群 (1/150)
 (忠南大学校百済研究所 2000 一部改変)

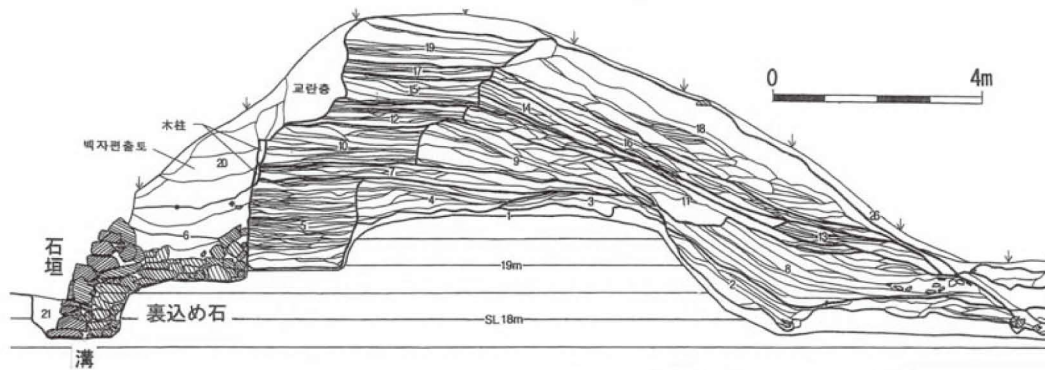


図 3-3 百済泗沘羅城東門跡南側土塁・石垣断面図 (1/130) (忠南大学校百済研究所 2000 一部改変)

図 3-4 百済泗沘羅城東門跡南側
 土塁前面敷粗朶 (北より)
 (1991年12月11日亀田撮影)

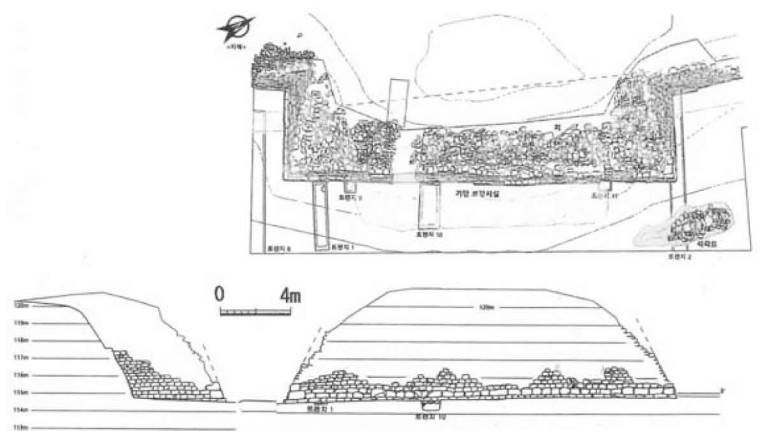


図 3-5 百済泗沘羅城東羅城雉城 (1/400)
 (百済古都文化財団 2018 一部改変)